

K141.71

3.1a



教師用

高等小學鉛筆畫帖

文部省

141.71

3.1

a

國立編譯館



高等小學鉛筆畫帖

教師用

文部省

大正
11.10.25.
丙寅

凡例

一。本書は尋常小學鉛筆畫帖に連絡して鉛筆畫を課する高等小學校の圖畫科の教科書に充つるため編纂したるものにして、分ちて兒童用書と教師用書との二種とす。

二。教師用書は兒童用書中にある教材の取扱方を記述し、第一及び第二學年用併せて一冊となしたり。

三。本書中の教材は次表に示したる如き圖畫の種類と割合にとよりて選擇したり。

合 考 記 寫 臨 計 案 據 畫 生 畫	種 類		尋 常 小 學 校	高 等 小 學 校
	年 別	學 校 別		
一 〇 〇	第三學年	四 〇	尋 常 小 學 校	高 等 小 學 校
一 〇 〇	第四學年	二 五 〇 三 五		
一 〇 〇	第五學年	二 五 〇 二 五		
一 〇 〇	第六學年	一 〇 三 〇 五 〇 二 〇		
一 〇 〇	第一學年	一 〇 三 〇 六 〇 一 〇	高 等 小 學 校	
一 〇 〇	第二學年	一 〇 三 〇 六 〇 一 〇		

四、児童用書中に掲げたる教材の外前表に示したる割合を標準として寫生記憶畫、考案畫等を課すべし、尙児童用書中の教材の一部を便宜參考圖として取扱ふも可なり。

五、本書は自在畫の外、時、尺度、三角、定規、コンパス等を使用して正確なる形態の畫方に慣れしめんことを期したり。

六、教師用書は教授の便を計り、児童用書に掲げたる各圖につきて、要旨、教授の二項目を掲げて説明をなしたり、教授の項は更に又觀察畫方、注意等の小項目に分ちて、教授上必要なる注意事項を記したれば、教授者は適宜に之を分解して活用すべし。

目録

第一學年

第一圖	かばん	一
第二圖	針箱	二
第三圖	薔薇の花	三
第四圖	笥	五
第五圖	金魚	六
第六圖	蜻蛉と蝶	七
第七圖	蝙蝠傘	九

第八圖	提灯	一〇
第九圖	月夜の海	一二
第十圖	紋形	一三
第十一圖	指差	一八
第十二圖	男兒	一九
第十三圖	人の姿勢	二一
第十四圖	家	二二

第二學年

第一圖 椿……………	三五	第八圖 石榴……………	三六
第二圖 樹木……………	二六	第九圖 景色の參考圖……………	三七
第三圖 漁舟……………	二八	第十圖 山家……………	三九
第四圖 玉手箱……………	三〇	第十一圖 少女の顔……………	四〇
第五圖 枇杷……………	三一	第十二圖 牛と馬……………	四二
第六圖 底……………	三三	第十三圖 雪の朝……………	四四
第七圖 葵……………	三五	第十四圖 模様……………	四六

高等小學鉛筆畫帖 教師用

第一學年

第一圖 かばん

要旨

かばんを畫かしめて器物の畫方練習をなす。

教授

一。觀察 平面と直立面との界線、並びに平面と直立面とに投じたるかばんの影を觀察せしめて、直立面に立て掛けたるかばんを畫きたることを知らしめ、更に光線の方向と陰影の方向、陽面と陰面とに用ひたる線の大小、各部の形狀、陰影

の畫方につきて觀察せしむべし。

二。畫方 平面と直立面との界線を用紙の下方に引き、かばんの四隅の點を取りて四角形を作り、蓋・袋・左側面を區劃し、提紐・名刺挾・錠止の輪廓を畫きて陰影を施さしむべし。

三。注意 陰影の濃淡に注意せしむべし。

第二圖 針箱

要旨

針箱を畫かしめて、立方體に屬する形の畫方を練習す。

教授

一。觀察 方柱に屬する形の針箱にして、光線は畫者の左上後方より來りたる場合を畫きたることを知らしめ、箱の内外

面の陰針刺の右側面の陰、絲卷の影の平面と箱の側面とに投じたる有様、卷きたる絲の中央の脹みを表したる曲線等を觀察せしむべし。

二。畫方 平扁なる方柱を畫き、箱の立上り(上部)と胴との界線を入れ、上部の仕切、及び針刺の輪廓を定め、正方形の絲卷を畫き、更に分銅形の絲卷を配置して全部の輪廓を取り、陰影を施さしむべし。

三。注意 太き線と細き線との用方、陰は淡く影は濃く畫くこと、並びに絲卷の影の畫方等に注意せしむべし。

第三圖 薔薇の花

要旨

薔薇の花を畫かしめて、花の畫方を練習す。

教授

一。觀察 花の中心、花瓣の表裏及び組合方、葉の表裏等につきて觀察せしむべし。

二。畫方 花瓣の突出點を見計らひて四角形の輪廓を作り、花軸・莖・葉柄・中肋を畫き、次に花の中心を定めて右上方にある大なる二枚の瓣と左下方に向ひたる瓣との界を一直線にて區劃し、大なる瓣より次第に小なる瓣の輪廓を定め、葉は羽狀葉をなせる先端の小葉より畫き始めて順次下方のものもを畫き、後に彩色せしむべし。

彩色は先づ淡赤色にて花の全體を平に塗り、其の未だ乾燥せざる間に濃赤色を加へて隈取したるが如く自然に浸込

ましめ、淡綠色にて莖と葉とを平に彩色す。

三。注意 瓣と葉との裏返りたる部分、並びに瓣の組合方に注意せしむべし。

第四圖 筍

要旨

筍を畫かしめて、錐體に屬する形の畫方を練習す。

教授

一。觀察 筍は圓錐體に屬する形なることを知らしめ、皮の重り方、根の畫方及び陰影・色彩等につきて觀察せしむべし。

二。畫方 頭と根の著しく出でたる點とを見計らひて三角形の輪廓を畫き、中央を脹らし、根と皮との界を印し、皮の各片

と根とを畫き、陰影を施し、皮を帶赤紫色の淡きもの、根と皮の先端とを淡黄色にて平に塗らしむべし。

三.注意 皮の組合方につきて注意せしむべし。

第五圖 金魚

要旨

金魚を畫かしめて、魚の畫方練習をなす。

教授

一.觀察 金魚の體は略菱形をなせること、並びに頭・目・鰓・鰭の位置・形狀・大小・色彩等を觀察せしめ、更に體の方向、各部の割合を知らしむべし。

二.畫方 金魚の口・脊・鰭の前端・體と尾との界・腹・鰭の附きたる

處の四點を定めて菱形を畫き、尾・脊・胸・腹の鰭の位置を定めて輪廓を取り、鰓・口・目・鱗を畫き、水の線描をなして後、彩色せしむべし。

彩色は先づ淡赤色に僅に青色を加へたる帶赤紫色の淡きものを平に塗り、次に濃き部分に赤色を施し、淡青色にて水を平に彩色せしむべし。

三.注意 水面の波紋と金魚との方向を一致せしむること、並びに金魚の赤き色の波紋に映じて淡くなりたる有様を表すこと、波紋の通りたる部分の線描を軽く、淡く畫くこと等に注意せしむべし。

第六圖 蜻蛉と蝶

要旨

蜻蛉と蝶とを畫かしめて、虫の畫方を練習す。

教授

- 一。觀察 手本の圖は平面圖として畫きたることを知らしめ、各の翅の形狀・大小・彩色等を觀察せしむべし。
- 二。畫方 蝶と蜻蛉との各の位置を定め、蝶は何れも左右兩翅の先端に相當する位置を記し、其の間を結合して梯形を作り、之を基礎として體と左右兩翅とを區劃して輪廓を定め、觸角・目・體・兩翅を畫き、紋形を入れ、淡黃色にて彩色せしむべし。蜻蛉は體の方向と長さとを定めて、左右兩翅を畫き、全形を訂正して後、翅は淡赤色、體は淡青色にて彩色せしむべし。
- 三。注意 蝶類の翅の紋は一定せるものなれば正しく畫かし

むべし。

第七圖 蝙蝠傘

要旨

蝙蝠傘を畫かしめて、錐體に屬する形の畫方を練習す。

教授

- 一。觀察 平面と直立面との界線並びに蝙蝠傘の影が平面より屈折して直立面に投じたることによりて、直立面に立て掛けたる蝙蝠傘を畫きたることを知らしめ、更に柄と傘の部分との長さの割合・皺と其の畫方との關係を觀察せしむべし。

- 二。畫方 平面と直立面との界線を用紙の下方に定め、一直線

の柄を畫き、柄と傘との部分を分ち、傘は三角形若しくは尖りたる四角形の輪廓を取り、骨の一部と布の折目とを畫き、柄の球部、房、裝飾、陰影の順序に仕上げて彩色せしむべし。彩色は傘と房とを紫色、柄を淡橙色、裝飾を淡黃色、球を淡青色にて平に塗らしむべし。

三。注意 柄の本と頭とを連續せるやうにし、骨は傘の頂點に集合したる如く畫くことに注意せしむべし。

第八圖 提灯

要旨

提灯を畫かしめて、球と圓柱とに屬する形の器物の畫方を練習す。

教授

一。觀察 提灯の骨及び口と底との曲線によりて、此の提灯は畫者の目の高さよりも高さ位置にあるものを畫きたることを知らしめ、更に胴は略球形にして、口と底とは丈低き圓柱形なること、並びに口の直徑は底の直徑よりも稍大なること、骨の曲線をなせること、及び口と底との側面の白き部分を觀察せしむべし。

二。畫方 口・胴・底の三部分を通ずる縦の中心線を畫き、胴・口・底手の高さを定めて、胴・口・底・手・短冊・吊緒等の順序に輪廓を畫き、口と底との暗き部分を塗り、赤色にて胴、淡紫色にて口と底、淡青色にて短冊を平に彩色せしむべし。

三。注意 骨のために胴及び紋の周圍の線に屈曲をつけて畫

くことに注意せしむべし。

第九圖 月夜の海

要旨

月夜の海を畫かしめて、景色の畫方を練習し夜の畫方を知らしむ。

教授

一。觀察 月と海上に映じたる月光との關係、並びに波の畫方、船の形狀等を觀察せしめ、且夜の有様を表す彩色につきて注意せしむべし。

二。畫方 用紙の中央より稍、下方の處に横線を引きて地平線を定め、船體を畫きて、帆柱を立て帆をつけ、波と月下の淡き

雲とを畫き、陰の部分に鉛筆にて暗く塗り、後彩色せしむべし。

彩色は月と海面の輝きたる部分とを残して、先づ淡紫色にて全部を平に塗り、更に月下の雲、船、海面を平に淡紫色にて彩色し、而して後、月と海面に映じたる月光とを淡黄色にて彩色せしむべし。

三。注意 空色を濃くせざること、海面に映じたる月光を遠方に至るに随ひ次第に狭くすること、遠方の波は近き處の波よりも低く且小さく畫くことに注意せしむべし。

第十圖 紋形

要旨

本邦特有の紋形を畫かしめて、便化の巧妙なることを知らしむ。

教授

一。觀察と説明 もつかうは本來は簾の上邊に添へて横に張りたるもつかうといふ帛に染出したる形なるが、紋形をももつかうと稱するなり。是は瓜を輪切にしたる切口の形を便化したるなりといふ。

りうごは絲を紡ぐ針に附けたる輪鼓（調絲を掛くるもの）と稱するものの形より便化したるものなり。

寶珠は寶珠の玉と稱する立體に作りたるものの形より取りたるものなり。

松皮菱は松の皮の紋やうを菱形に便化したるものなり。

雪輪は雪の結晶形を便化したるものなり。

まんじは佛の胸に描く字なり、吉祥萬徳の相として紋形に用ひらる。

矢筈は矢につきたる羽の形を便化したるものなり。

地紙は扇の地紙の形を取りたるものなり。

すみいりかくは正方形の四隅を入隅に取り、且圓みを附けたるものなり。

駒は將棊の駒の形を取りたるものなり。

分銅は秤の皿に載せて物の重さを計る道具の形を便化して圓形に作りたるなり。

團扇は古團扇の形を取りたるなり。臺灣には今も此の形に似たるものあり。

杵は手杵と稱するものを便化したるものにして、中央の細き部分を握りて使用するものなり。

すみきりかくは正方形の四隅を切取りたるものなり。

琴柱は琴の絲を掛くる柱の形を便化したるものなり。

釘貫は往時鐵の平板に方形の孔を穿ちて角釘を抜くに用ひたる道具を平面圖に畫きたる形なり。

鼓の胴は鼓の胴を取りて便化したるものなり。

毘沙門龜甲は三箇の龜甲を接して其の接したる部分の三箇の邊を去りたる形なり。

おもだかはおもだかと稱する草の葉の形を便化したるものなり。

ももなりは桃の果實の形を便化したるなり。器物に彫抜き

たるももなりは猪の目と稱す。猪の目とは「い」字の左右を對照して便化したるに似たるが故なりといふ。

源氏香は香合を行ふ際種種の香を包みて一人五包を燒き、五包とも皆異香なるときは「||||」の如く同長の線を五本畫き、五包の内同香ある時は縦の線の上方に横線を畫きて連絡するものなり。故に手本に示したる源氏香は、右より數べて第一と第四とは同香、第三と第五とは同香、第二は全く同香なき意味を表したるものなり。かくして得たる形を紋形に使用するに至れるなり。

唐團扇は軍配の形を取りたるものなり。
手本を觀察せしめ、右の事項の大要を説明し、便化の巧妙なる處を知らしむべし。

二.畫方 任意に數種を選択して畫かしむべし。
三.注意 便宜三角定規・コンパス等を使用して畫かしむるも可なり。
正確に畫くことに注意せしむべし。

第十一圖 指差

要旨

指差を畫かしめて、手の畫方を練習す。

教授

一.觀察 上圖は右手の背面にして、下圖は掌の方を示したるものなり。兒童各自の右手を握らしめて、手本と對照し、各部の形狀・明暗・割合等を觀察せしめ、更に高低と手本の陰影と

の關係を知らしむべし。

二.畫方 上下兩圖とも適宜の點を選び、之を結合して大體の輪廓を畫き、上圖は指と手の背との部、下圖は指と掌との部分を區劃し、指より始めて次第に全體の形狀を訂正し、低き部分に陰を施さしむべし。

三.注意 教授時間の都合にては、一圖丈畫かしむるも可なり。又手本を參考として兒童の手を寫生せしむるも可なり。

第十二圖 男兒

要旨

男兒を畫かしめて、全身人物の畫方を練習す。
教授

一。觀察 側面向の男學生を畫きたるものにして、全長は頭の略六倍に相當し、手の長さは肩より足までの略二分の一なることを知らしめ、更に袴の長さと衣服の上部との割合を觀察せしむべし。

二。畫方 先づ中心線を引きて之を六等分し、而して頭は帽子の上方の前後兩端、鼻先、顎、後頸の五點を取りて五角形を作り、體は後襟、胸、袴の裾の前後兩端を取りて四角形を作り、足の大體の形を取り、而して頭、衣服の上部、手、靴、袴、足の順序に各細部分の形を訂正し、上方より下方に次第に仕上げしむべし。

三。注意 全身の割合を失はざるやう注意せしむべし。

第十三圖 人の姿勢

要旨

人物の各種の姿勢を畫く練習をなす。

教授

一。觀察 徒手にて走れるものの姿勢、品物を携帯して走れるものの姿勢、品物を背負ひたる時前方に傾ける姿勢、品物を提げたる時體と足との變化したる姿勢、物を投げんとする時著しく後方に傾きて手に持ちたる物に力を集めたる姿勢、足を直立し腰を屈したる禮法の姿勢等の各種を示したることを知らしめ、且動作と足先體、兩手の變化との關係を十分觀察せしむべし。

- 二。畫方 兒童に畫方を工夫せしめて任意に畫かしむべし。
 - 三。注意 各種の姿勢を成るべく多く練習し、記憶にて畫き得るやうなさしむべし。
- 姿勢圖を畫くには體の重心に特に注意せしむべし。

第十四圖 家

要旨

家を畫かしめて、景色の畫方を練習す。

教授

- 一。觀察 沼の如き水邊にある家を主眼として畫きたることを知らしめ、中央の小高き樹木の壁と軒とを縦に切りたる處並びに家中の人物、橋を觀察せしめ、是等は此の景色中に

て最も能く働きたる部分なることを知らしめ、次に屋根壁・岸・水等の面積の割合につきて觀察せしむべし。

- 二。畫方 柱の本を地平線の位置と定めて用紙の中央より稍、下方の處に横線を引き、是より上方に軒端と大なる家の棟とに相當する横線を畫き、屋根の傾斜の勾配を定め、土坡・橋・人物・樹木等の輪廓を取り、各部の形を訂正して仕上をなし彩色せしむべし。

彩色は先づ暗紫色の淡きものにて屋根の全面・帶赤紫色の淡きものにて壁・淡黄色にて樹木・水邊の草・及び橋の手前の道の兩側を平に塗り、更に暗紫色の極めて淡きものにて草・水橋・道の兩側を平に彩色し、次に棟を淡綠色・人物並びに水と空とを淡青色にて塗らしむべし。

三。注意 屋根及び壁の紫色を濃く且赤くせざるやう注意せしむべし。

棟の緑色は家の棟に草を植ゑたる有様を示したるなり。

第二學年

第一圖 椿

要旨

椿を畫かしめて花の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 本圖は白椿を畫きたるものにして、花の白色を表すために其の周圍を淡青色に塗りて浮出でたる如くし、花瓣の中央凹き所を表す爲に凹所に陰を施したり。椿の葉は濃綠色にして滑に且光澤あるが故に、細く尖りたる鉛筆にて筆痕の見えざる様に黒く塗潰して光線の當りたる所を白色と灰色とに表したることを知らしめ、而して

後花及び葉の形狀・色彩・方向並びに各部の割合等を觀察せしむべし。

二. 畫方 花の位置を定めて瓣の著しく出でたる點を取り、三角形・四角形若しくは五角形の輪廓を取り、枝及び葉の中肋を畫き、瓣・雄蕊・葉の順序に各部の形を作り、陰を入れ、葉・雄蕊・枝・地色の順序に彩色を施さしむべし。

三. 注意 本圖は花の寫生に入る準備として掲げたるものなれば、之を參考として直ちに花を寫生せしむるも可なり。枝と雄蕊との連絡、葉面の鉛筆の使用法につき特に注意せしむべし。

第二圖 樹木

要旨

樹木の幹の畫方を練習す。

教授

一. 觀察と説明 本圖は樹木の皮の表面異なるに隨ひ、鉛筆の用法を異にする描法を示したるなり。

本圖にて幹の輪廓線に屈曲を多くつけたるは老木を示し、前方の木は樹皮滑にして光澤ある樹木の趣を表さんがために鉛筆を柔に使用し、後方の木は樹皮粗糲にして光澤なく肌荒れたる樹木の趣を表さんがために鉛筆の線を明瞭に表したることを知らしめ、更に幹及び枝の形狀と葉の畫方とを觀察せしめ、葉は多數集りて一團をなせるものを其の輪廓の大體のみ寫したることを知らしむべし。

二。畫方 前方の木と後方の木との主幹の輪廓を畫き、枝及び葉をつけ、樹皮の趣を表し、次に帶青綠色の淡きものにて前方の樹を塗り、淡岱赭色にて後方の木を塗り、淡綠色にて葉と地面とを塗らしむべし。

三。注意 本圖は樹木の寫生に入る準備として示したるものなれば、本圖を參考として直ちに樹木の寫生をなさしむるも可なり。直ちに樹木の寫生をなさしむるときは、葉及び枝の多くあるものを避けて、先づ幹を畫かしむべし。これ葉及び枝の多くあるものを略して畫き、實際の感を表さしむることは初學者には困難なればなり。

第三圖 漁舟

要旨

舟の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 本圖は漁舟の陸上にあるものを畫きたるものにして、舟の後方にある横線は陸を表したるものなり。舟の影の地面に投じて波狀をなしたるは地面に凸凹あるがためにして、舳・艫兩端の影の舟底より離れたるは舳・艫の兩端地面より離れて稍上りたるによることを知らしめ、更に舟の形狀・陰影各部の割合を觀察せしむべし。

二。畫方 舟の位置を定め、舳・艫の兩上端と舳の最下端とを取りて三角形を作り、舟體より畫き始めて次第に各部分を畫き、陰影を施し、最後に陸を畫かしむべし。

三。注意 影は投影面の形狀によりて種種變化することに注意せしめ、且各部分の割合を誤らざるやう注意して畫かむべし。

第四圖 玉手箱

要旨

玉手箱を畫かしめて、立方體に屬する形の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 本圖は黒塗の漆器に金蒔繪を施したる玉手箱を畫きたるものにして、蓋の甲板は脹みて曲面をなしたることを知らしめ、次に蓋の甲板に投じたる緒の影は最も濃く、前面の影は甲板の影よりも淡くして、右側面の陰より

は稍濃く、右側面の陰は地面に投じたる影よりも稍淡く、地面の影は器物に接したる前方に於て濃く、後方に退くに隨ひて次第に淡くなりたることを知らしめ、更に各部の形狀割合を觀察せしむべし。

二。畫方 蓋の甲板を平面と見做して、立方體に屬する器物の畫方にて箱を畫き、蓋と身とを區別し、蓋の甲板の曲面を表し、緒をつけ、蒔繪模様を入れ、陰影を施し、箱の後方にある立面と平面との界線を入れ、灰色と淡黄色とにて箱を平に彩色し、淡朱色にて緒に圓みをつけて彩色せしむべし。

三。注意 緒の位置並びに陰影の畫方に注意せしむべし。

第五圖 枇杷

要旨

枇杷を畫かしめて、果實の畫方練習をなす。

教授

一。觀察と説明 枇杷の葉は椿の葉よりも粗糲にして光澤少く、且高低あるが故に鉛筆を少しく粗に用ひて筆痕を表したること、果實は白・黄・陰の三段にて圓みを表したること、並びに上方にある果實の陰は下方にある果實に投じたる影よりも淡く畫きたることを知らしめ、更に各部分の形狀・色彩・陰影割合につきて觀察せしむべし。

二。畫方 枝の上端と左右の葉の先端とを取りて三角形を作り、枝と左右兩葉の中肋とを畫き、果實と葉との輪廓を定め、陰影を施し、淡黄色にて果實、淡綠色にて葉極めて淡き岱赭

色にて枝の上端を彩色せしむべし。

三。注意 葉面の鉛筆の用法につきて注意せしめ、彩色の際は果實の白く光りたる部分並びに陰影と光線の方向との關係につきて特に注意せしむべし。

第六圖 鷹

要旨

鷹を畫かしめて、鳥類の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 鷹は右向にして少しく頭を前に向け、枝は本の方近くして先端次第に遠く且低く、光線は畫者の稍後方の高き所より來りたる場合を畫きたることを知らしめ、更

に嘴の尖りて前方に出でたることを表すために嘴を濃く畫きたること、鷹の尾を淡く、枝を濃く畫きて間隔あることを表し、鷹の足本よりも下方にある枝には濃く陰を施して先端次第に遠く下れることを表したること、羽は畫き始めと終りとに筆の當をつけずして中間を強く濃く畫きたること並びに各部分の形狀と割合とを觀察せしむべし。

二。畫方 鷹の嘴の本より尾端を通じたる直線を以て鷹の傾を定め、然る後任意に輪廓を取り、枝を畫き、上方より始めて次第に下方を畫かしむべし。

三。注意 目・嘴・爪を鋭くして猛鳥の相を表すこと、羽を軽く見ゆるやう淡く畫くこと、並びに枝に止りたるやうに畫くことに注意せしむべし。

第七圖 葵

要旨

葵を畫かしめて、花の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 本圖は黃蜀葵（きんしやくき）と稱する葵の花を畫けるなり。花は右前方に向ひたるものにして、花・葉・莖共に同一の墨色にて畫きたること、並びに各部分の形狀・色彩割合につきて觀察せしむべし。

二。畫方 椿の花の畫方と同様に花の位置を取り、瓣の著しく出でたる端の點を定めて、四角形若しくは五角形の輪廓を作り、莖と葉柄並びに各葉片の中肋とを畫き、更に瓣の形を

訂正し、各葉片の大體の形を作り、毛筆にて花・莖・葉・葉柄の順に畫きて後、淡黃色にて花を彩色せしむべし。

三。注意 本圖を參考として他の花を寫生せしむるも可なり。本圖は畫筆を用ひず習字筆にて畫かしむべし。

第八圖 石榴

要旨

石榴を畫かしめて、果實の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 果實の形狀、各部の高低と陰の濃淡との關係、滑なる表面と陰の畫方との關係、曲面と鉛筆の用法との關係、各部分の色彩割合につきて觀察せしむべし。

二。畫方 圓形を畫きて之を上下の破片と割口とに區劃し、枝と葉とをつき、果實の輪廓を訂正し、割口・花落・種子を畫き、陰影を施し、淡綠色にて葉と果實の一部とを塗り、更に淡岱赭色を枝と果實の一部とに塗り、淡赤色にて種子を彩色せしむべし。

三。注意 種子の彩色に白き部分を残したるは、枇杷の果實の描法と同様に、光りたる部分を表したるなり。

第九圖 景色の參考圖

要旨

廣き自然の景色中より、畫として適當なる部分を選択する方法を示す。

教授

一。觀察と説明 上方第一段の景色は前景として水邊に三本の松樹と家屋とあり、中景として水並びに左方の水邊に松樹と船とを置き、遠景として遠山を取り、樹木と家とによりて水平に平行したる水と遠山とを縦に切りたる圖なり。然るに之を第二段、第三段、第四段に示したる如く或部分を切るるときは、何れも前景、中景、遠景を有し、且水平なる景色は樹木又は家屋にて切られ、樹木或は家屋は中央より左右の何れかに片寄りて變化ある面白き景色となることを知らしむべし。

二。注意 第一段に示したるが如き廣き景色を畫きたる圖を示し、面白き部分を切取る練習をなさしむるも可なり。

第十圖 山家

要旨

景色の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 本圖は田舎の景色を表したるものにして、山家は前に路を控へ後に山を負ひたること、山上の小高き木は松、山家の後にある黒く繁りたるものは杉、家の前にある枝のみの木は桃の木なること、路の左右は圃にして左方は右方よりも稍高く、圃と路との間には溝あり、溝には水ありて圃の畔水面に映じたること、路の中央にある點體の線は種種なるものの痕を示したるものなることを知らしめ、更

に圖家・山の占めたる面積の割合各部の形狀につきて觀察せしむべし。

二。畫方 家の柱の本と棟とに相當する二つの横線を畫き、各家の幅を定め、左右の圖と路とを區劃し、後方の山及び木の全體を畫き、更に進んで各部分の形を訂正し、家・木・山・圖・路・人物の順序に淨寫せしむべし。

三。注意 任意に彩色せしむるも可なり。

此の圖は同一色の墨を用ひながら巧みにかすれ筆にて濃淡を表し、遠近を分ちたる點に注意して畫かしむべし。

第十一圖 少女の顔

要旨

少女の顔を畫かしめて、人物の畫方を練習す。

教授

一。觀察 顔の目・鼻・口等各部の位置形狀並びに高低と陰の入れ方との關係につきて觀察せしめ、而して顔の各部の位置は凡そ左の割合の處にあること知らしむべし。

目は顔の全長の略二分の一の處にあり、鼻は目と下顎との間の略二分の一の長さに等しく、口は鼻と下顎との間の略三分の一の處にあり、耳の下端は凡そ鼻の先端と同じ高さにあり。

二。畫方 リボンの上方の左右兩端、左右の頬の脹みたる點、顎の下端の五點を結合し、又顎の下端と左右兩肩とを直線にて連結し、顔と衣服との大體の輪廓を作り、更に下げたる前

- 髪・顔面・リボン・襟を畫き、目・鼻・口・肩・耳其の他の部分の位置を定め形を整へて上方より次第に下方に仕上げしむべし。
- 三、注意 顔の各部の割合を正しくし溫和に畫くことに注意せしむべし。

第十二圖 牛と馬

要旨

牛と馬とを畫かしめて、獸類の畫方を練習す。

教授

- 一、觀察と説明 牛の體は少しく後方より見たる所を畫き、馬は少しく前向になりたる姿勢を畫きたり、牛と馬との各部にある線並びに陰は皆骨骼若しくは筋肉の有様を表した

ることを知らしめ、更に各部分の形狀・割合・陰影等につき精密に觀察せしむべし。

- 二、畫方 牛は體及び脚部の輪廓として略、正方形を畫き、之に頭部・頸部の輪廓として左右の角の本・鼻先・左脚と胸との界の點を取りて畫きたる四角形をつけ、更に頭・頸・體・脚を區劃し、右後脚を正方形外に出して畫き、各部分の形を訂正して頭より始め次第に後方に畫かしむべし。

馬も牛と同様に體と脚との輪廓として正方形を畫き、之に肩・胸・耳の三點を取りて畫きたる三角形をつけ、其の三角形に耳・右眼の突起したる所・右鼻孔・下唇・左顎の五點を取りて畫きたる五角形をつけ、然る後、體と脚とを區劃し、右前脚を正方形外に出して畫き、各部分の形を訂正して後、頭より次

第に後方に畫かしむべし。

三。注意 牛と馬とは何れか一疋を畫かしむれば可なり、各部の割合を正しく畫くことに注意せしむべし。

第十三圖 雪の朝

要旨

雪の景色の畫方を練習す。

教授

一。觀察と説明 雪の降りたる朝、雪を踏破りて學校に行く兒童の有様を畫きたるものなることを知らしめ、更に空と地面とを觀察せしめ、晴れたる時は通常地面暗くして空明きものなれども、雪の積りたるときは地面明くして空暗きこ

と並びに道の左方には緑色の草木と枯れたる草木との雜りたる藪と其の中に立ちたる高き木とを畫き、右方には路に添ひて枯竹の垣根あり、垣根の中に大なる樹木ありて、樹木の間に茅屋の見えたる有様を畫きたることを知らしめ、而して後、各部分の形狀・色彩・陰影・割合等を精密に觀察せしむべし。

二。畫方 先づ道の左右の線を定め、更に右方の竹垣左右の木の幹並びに右方の家の大體を畫き、各部分の形を訂正して、樹木・竹垣・茅屋・子供の順序に淨寫し、空色を帶青紫色の淡きもの、樹木・竹垣・茅屋を倍赭色に少しく黄色を加へたる淡色にて塗り、傘を淡黄色にて彩色せしむべし。

三。注意 鉛筆を細かに丁寧地使用して、雪の感を表すことに

注意せしむべし。

第十四圖 模様

要旨

動物を模様に変化することを知らしむ。

教授

一。説明 此の模様は日本古代の模様を書きたるものにして、上方の第一段の右方のものは蝶の便化にして橙色に墨を混じたる暗色の淡色と白色との配色左方のものは鳳凰の便化にして淡青色と緑色との配色なり。
第二段の右方のものは蝙蝠の便化にして青色と淡紫色との配色左方のものは蝶の曲線的便化にして淡赤色と暗赤

色との配色なり。

第三段の右上方のものは鳩の便化にして淡黄色と橙色に墨を多く混じたる色との配色中央のものは燕の便化に雨をあしらひたるものにして灰色に僅に岱赭色を加へたる色と淡青色との配色左方のものは蝶を直線的に便化したるものにして淡黄色と淡青色との配色なり。

第四段右上方のものは兎の正面向を便化したるものにして帶赤紫色の淡色と白色との配色中央のものは青海波に鴛鴦を便化して組合せたるものにして赤色と淡緑色との配色左方のものは目高を便化して水紋と組合せたるものにして淡青色と暗青色との配色なり。

二。注意 手本の模様を参考とし他の動物を便化して模様を

作らしめ、且彩色せしむべし。

高等小學鉛筆畫帖 教師用終

K141.71-3.1-2

41317

大正元年十月十四日印刷
 大正元年十月十七日翻刻發行
 大正元年十月廿五日翻刻發行

高等小學鉛筆畫帖教師用

定價金 六錢

著作權所有 文部省 著作兼發行者

翻刻者

東京市日本橋區新右衛門町拾七番地 日本書籍株式會社

印刷者

代表者 大橋新太郎
東京市日本橋區通一丁目拾九番地 大倉保五郎

印刷所

東京市京橋區新榮町五丁目七番地 大倉印刷所

大正元年十月十九日
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町拾六番地 株式會社 國定教科書共同販賣所



